■（２２４）被災地でもあった視覚障害者の線路転落、その対応は……

東京の地下鉄で、視覚障害者が駅ホームから線路に転落し、電車にはねられて亡くなる事故があった。視覚障害者にとって、「ホームは欄干のない橋」という人もいて、ホームドアの設置が急務との声が高まる。東日本大震災で被災した知人男性の姿が重なった。

その男性は、次第に視野が狭くなり、失明につながる難病を患う。発症は中年になってからで、白杖を使うようになった。病気を受け入れて、患者団体の会議に、岩手県釜石市内の災害公営住宅から、組織のある盛岡市までＪＲのローカル線で通う。その日の帰りはいつもと違う駅で降りた。無人駅で、車掌が降車客の切符を回収して、列車は発車した。男性は白杖をつきながらホームを駅舎に向かっていた時、足を踏み外して線路に落ちた。列車の本数が少なく、けがは腕のねんざ程度で済んだ。そんな過疎地の駅にホームドアは検討外だ。でも、ＪＲはホーム端を黄色と黒色の縞模様で塗り防止策を講じてくれた。

東京の事故の被害者も同じ病いだろう。盲導犬を連れても、白杖をついても、特に大人になってからの視覚障害者は、外歩きは大変だ。まずは声をかける意識を持ちたい。（山）